

汲古一心

『信・越・上州の碑から』(二)

中村素堂

この隣りの長野県松本市、諏訪市に近い塩尻峠の頂点に小野という中央線の駅がある。その駅前には大きな鳥居があり、鬱蒼たる森が見えていかにも由緒ある神社でありそうである。「小野神社」の鎮座は、上・下諏訪大社と関係の深い建御名方命を祀ることで、国運を祈り社殿を整備したことを記念した巨碑を建てることになった。文は慶応大学の国府犀東先生が撰し、題字は総理大臣の林銑十郎大将が書かれた。これは碑面も広く字も一字が七センチか八センチ方ぐらゐの大字楷書で、林閣下の下見を経て長野県の方へ碑稿が廻付された。最初三人ぐらゐの石匠が手分けして上中下三方から彫る予定だったのを変更して、その親方が「ひとりで彫りたい。また碑の裏面か表の一隅に自分が刻したと署名を入れさせてもらいたい」といつてきた。そのために竣工の日時が大分遅れることも承知してほしいとあつて、碑文にある日時より半年ぐらゐずれて除幕式をあげることにした。

初めは林大将と私が除幕式に出席の約をしてあつたが、この遅延の間に林大将は脳何とかで急逝され、しぜん私も行かれずに落成の式は済んだが、この石屋さんは大分いろいろな心得のある人と見えて、しばらくして美事な一枚の拓本を送つてきた。

これはさすがに玄人の拓でムラのない美拓なので、貞香会の諸君や大正大学の学生達に見せると、時刻表などを調べていたが、そのうちみんなで東京から信州まで拓本をとりに行つた。巨碑は高く手が届かないので、小野町消防署へ行って消防用のはしごを借りてきて、碑に登り全拓を何枚も作つてきたのは驚いた。随分危いことだのに女性の会員も行き、それに消防署も備品のはしごを貸すなど、いかにも太平な話だと後でもビックビックものだった。しかしこの学生や女子諸君の拓もなかなかの手腕であつた。これを剪装本に仕

立てて貞香会事務局から刊行の企画もあつたが、製本技術の不用意のために文字の一部を切除したりして沙汰やみとなつたのは惜しいことであつた。

しかし、これらはともに戦前の作であるが、群馬県前橋市の群馬会館前に「清水及衛翁称徳碑」という碑が昭和二十七年に出来、那須浩博士の撰文、石黒忠真男爵の題字で楷書の作品、これより先の昭和二十五年の末には同じく群馬県吾妻郡長野原町に「木楡吾川先生称徳碑」が除幕された。これは安岡正篤先生の撰文に、元通信大臣小泉又次郎先生の題字で、字はどちらも方六、七センチ角ぐらゐの楷書だが、刻者の技術からいうと後者はかなり優れているようである。一度拓を作つて剪装本に作りたいたいと思つている。

金石に刻むものは存在も長いし人目にも触れるので、まあ拙いなりに骨を折つているのであるが、ここに書いた碑はみな腕の良い石匠に恵まれて筆者の不備も補われるくらいだが、タマにはその裏もある。戦前の作であるが、九州の耶馬溪の中にある古い城跡に建てた若槻礼次郎氏題字の碑は一見自分の字のように見えにくいぐらいの粗暴な刻で、読むには足りるが文字の鑑賞には全くならない。

これと四、五年あるいはもつと前のころ、京都のある古刹に信者のための会館造営に伴い、その題字を書いたが、これも随分拙劣な彫りで、耶馬溪のものと並んで下手の双壁のように思われ、したがつて人々にもその所在などをいわないようにしている。

意外なのは、インドのブツダガヤに建てられた「国際仏教会館」の題字で、隸書風に書いたものをレッドストーンという粗面の石に現地の石屋さんが刻むので心配していたところ、写真で知つただけではあるが、意外も意外なかなかの出来ばえなのには驚いた。

刻するための字は半分石匠の技量次第だから、その辺をたしかめないとなに残念なハメになることもあるのだ。